

第 1 話

グループ結成・共同生活・レッスン後の オイルマッサージ・兜合わせ

世はまさに、アイドル戦国時代。星の数ほど存在するアイドルの中でいま、一際輝きを放つ新星が誕生しようとしていた。

ダチュッ!!♡♡ダチュッ!!♡♡ダチュッ!!♡♡ダチュッ!!♡♡
♡ダチュッ!!♡♡ダチュッ!!♡♡

「光莉……っ! マジで、……っ、今も夢見てるみたいだ! ずっと、
ずっと一緒に……最高の景色、見ような……っ!？」
「れーくん……っ♡ んほおっ♡……っ! 見るう♡絶対……っ♡
♡♡♡」

そこは、華やかなデビュー記念配信の真ただ中。ステージには巨大なベッドだけが設置されている。その乱れた紫色のシルクの上で、おのひかり小野光莉とたいがれお大河玲央は全世界へ向けて、事務所伝統の『お披露目セックス』を行っていた。

有料配信の同時視聴者数は、すでに 50 万人を突破。事

務所独自のスクショ・録画不可という配信環境の中、全世界のファンが固唾を吞んでふたりの痴態を見守る。

「あッ、……っ、んほおお♡……っ、れーくん♡イグツツ!!
♡♡イグイグイグイグイッちゃうううう”う”う”〜〜〜〜〜
〜ツツツツ!!!♡♡♡♡♡」

「俺も、イク……っ!!」

……ドビュルルルルルルルルルルルルル〜〜〜〜
〜つつつつつ!!!!♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

この瞬間、アイドルデュオ「Brille」は衝撃のデビューを飾ったのだった。

※

【Brille デビューまで 365 日】

「失礼します。……遅くなりました」

「光莉、時間通りだよ。入って」

僕、小野光莉は、緊張しながら重厚な会議室に入った。

中には役職のついた社員さんたちがズラリと並んでいる。
めったに会えない社長までいるなんて……。え、僕何かやらかした!?

「あ、大河くんも呼ばれたんだ」

「はい」

その中に、後輩の大河玲央くんがポツンと座っていた。

彼は入所して日は浅いが、圧倒的なダンススキルとカリスマ性で人気急上昇中の練習生。恵まれた体格に涼やかな切れ長の目元、艶やかに波打つ黒髪……彼を構成するパーツのすべてが芸術品みたいで、同性の僕からみてもカッコいいと思う。

歌以外は見た目もダンスも平均な僕からすると、嫉妬する気すら起きないほど眩しい存在だ。

「全員揃ったから始めるよ」

社長が立ち上がると、室内に心地よい緊張が走る。

「結論から言う。小野光莉、大河玲央。このふたりをアイドルデュオとしてデビューさせる。おめでとう!」

パチパチパチパチ……。

「え……っ、あ、ありがとうございます……っ!？」

長年夢見たデビュー。でも、意外とあっさり告げられるものなんだ。

社員さんたちが温かい拍手を送ってくれるけど、全然実感が湧かない。というか、デュオ!? 隣の大河くんを見れば、彼も驚いたように目を見開いている。

「驚いたかな。人数を増やす案もあったんだけど、やっぱりこのふたりの『相性』がベストだと思ったんだ」

「はあ、相性……ですか」

デュオってことは、何をするにもふたりっきり。仕事も、練習も、そして……。

「さて、君たちをデビューさせるのは1年後だ。我がステラエ

ンターテインメントの『鉄のルール』は覚えているかな？ 大河、言ってみて」

「はい。ステラエンターテイメントからデビューするアイドルは、スキャンダル防止及びチームワーク向上の観点から、メンバー同士でのセックスを義務付ける」

「……っ!!」

クールな大河くんの口から、淡々と『セックス』なんて言葉が出てきて、思わず心臓が跳ねた。

そう。コンプライアンスが叫ばれる昨今、芸能界においてスキャンダルは一発退場の命取りだ。どこから私生活が漏れるかわからない現代において、ステラエンターテインメントが出した答えは……メンバー間でのセックス。

デビューから最低 4 年間、メンバーは共同生活を送り、互いの性欲を処理しあうことで、女性問題やトラブルに巻き込まれることなく『健全な』グループ活動を行うというものだ。

一見、正気の沙汰とは思えないルールだが、「どこの馬の骨かもわからない女とコソコソ遊ばれるより、顔のいいメンバー同士が合法的にいちやいちやドスケベしてくれた方が、安

心して一生推せる!!」と、ファンからはむしろ大絶賛。いまや事務所の信頼を担保する最強の制度と化していたのだ。

「これから1年、デビューに向けて『性行為』も含めて全力で君たちをサポートする。頑張ってくれるかな？」

「は、はい……っ! よろしく願います!」

「……よろしく願います」

僕は隣に座る玲央くんの顔を盗み見た。表情は読み取れないけれど、伏せられた睫毛の奥にある瞳は、驚くほどギラギラと熱烈な光を宿している。……そうか、あんなにクールな大河くんだって、デビューが嬉しいんだ。

僕だって、夢にまで見たデビューだ。嬉しくないはずがない。けれど、僕たちはふたりきり。もし、その……身体の相性が悪くてうまくいかなかったら? そしたら僕たち、一体どうなっちゃうんだろう。

高鳴る鼓動が、期待よりも不安で少しだけ速くなった。

※

「せんせ、っ!待って……っ、んあ!」

嫌な予感がして思わず声を上げたけれど、遅かった。先生は玲央くんの手を強引に掴んで重ね、僕のお尻を左右に割り開いたのだ。

ぬちゃあ……っ♡

「ひゃん……っ!?!」

隠れていた秘所が空気にさらされ、思わず身体がびくりと跳ねた。

「へえ、綺麗なピンク色しているな」

「やだっ!せんせえ、やめてください!」

「先生!だめです……っ!光莉くんが嫌がっているじゃないですか……!!」

玲央くんが止めようと声を荒らげる。けれど、先生はそんな彼の抵抗に鼻で笑った。

「……玲央。ここが、お前専用まんこになる場所だ」

「はぁ？何を言ってるんですか……っ!？」

先生は呆然とする玲央くんの手を重ねたまま、穴に触れるか触れないかギリギリのラインをグニグニと揉み込みながら、授業のように説明する。

「まだ硬く閉ざされているが、いずれお前のちんぽを挿れる場所だぞ？……お前、さっきからずっと勃起してるよな。それって、このムチムチしたデカイケツを見て、エロい想像をしたからじゃないのか？……自分のちんこを奥までねじ込んで、光莉をアンアン言わせて鳴かせてるところをさ」

「や、止めてください……っ、俺は、そんな……っ!!」

玲央くんの声は、もはや悲鳴に近い。それは、先生の言葉が凶星なのだと思うには十分だった。

（え……？あの勃起って疲れマラじゃなくて、僕の身体でえっちなこと想像したからなの……!？）

「……さて、今度は仰向けになるぞ」

淡々と体勢の変更を言い渡され、マットの上で入れ替わる

タイミングで玲央ちゃんと目が合った。いつも意志の強そうな鋭い瞳が、今は羞恥と罪悪感で、今にも泣きそうにへにやりと下がっている。それなのに、下半身も薄い紙パンツを突き破らんばかりに、バキバキに勃起したままだ。

「玲央くん……」

「光莉くん、ごめん……」

申し訳なさそうに顔を真っ赤にして視線を逸らす彼を見て、僕は胸の奥がドクンと熱くなった。優しくて紳士な玲央くん。ゆっくり進もうと僕を気遣ってくれたけれど、まだまだ血気盛んな 10 代の男の子なのだ。もし、僕のせいで我慢をさせていたのだとしたら……。

（いつまでも守られてばかりじゃダメだ。パートナーの僕が、助けてあげなくてどうする!）

「……先生。もうスッキリしたので、玲央くんにマッサージしてもいいですか」

「え……っ!？」

「……構わないよ。玲央、マットに仰向けに寝て」

「っ、俺もうっ伏せから……」

「そんなちんこおっ勃てた状態で、うつ伏せは無理だろ」

「ぐっ……」

「玲央くん。大丈夫だから、仰向けに寝て？」

「……わかりました」

恥ずかしそうに仰向けになった玲央くんの彫刻のように美しい身体を見て、反射的にゴクリと喉が鳴る。

「さて、光莉は玲央より身長が低いからな、全身を擦り付けてマッサージしてあげるのはどうだ？」

「ちょ……っ!!」

「分かりました。やってみます」

「光莉くん……っ!？」

こんなの、通常のマッサージを遥かに超えている。でも、この異常な状況に、僕も麻痺してしまったみたい。

「ん……っ♡」

ボトルからオイルをとろりと手のひらに零し、まずは自らの身体に滑らせて塗りつけていく。そして、体重をかけすぎないように注意しながら、玲央くんの顔の横に両手をつき、彼の

身体の上へと覆いかぶさるように乗り上げた。

ぬるり、とオイルを纏ったお互いの肌がぴったりと密着して、
なんだか変な気持ちになる。

「玲央くん、重くない……？」

「重くないです。……でも、ごめんなさい。勃起おさまらなくて……っ！」

僕を見上げる玲央くんは、自分の身体のコントロールが効かなくてパニックになっているみたいだ。僕のお腹に、彼の硬いペニスがゴリゴリと自己主張しているのがわかる。

「玲央くんのおちんちん、すごいね。ずっと硬いまま……。でも、大丈夫だから。一緒に気持ちよくなってみよ？」

僕は意を決して、ゆっくり身体を前後に擦り付け始めた。

ぬちゃあ♡ぬちゅ……ぐちゅり♡♡♡

「あ……っ♡ひゃん、あうっ♡」

「や、ば……っ!!」